

価値形態論と「直接的交換可能性」：貨幣発生論への解釈とアプローチ

著者名(日)	松嶋 孝雄
雑誌名	社会文化研究所紀要
巻	62
ページ	1-24
発行年	2008-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000376/

価値形態論と「直接的交換可能性」

貨幣発生論への解釈とアプローチ

松 嶋 孝 雄

- 1 はじめに
- 2 簡単な価値形態と「直接的交換可能性」
- 3 価値形態の発展と価値表現
- 4 同等性関係
- 5 価値形態論の意義：結びにかえて

1 はじめに

貨幣が存在しない交換の場、生産物の直接的交換の状態、が持続・発展していく過程で、どのようにして、貨幣が発生してくるのであろうか。このことを説得的に説明することは、そう簡単ではない。

『資本論』第1巻・第1篇「商品と貨幣」・第1章「商品」・第3節「価値形態または交換価値」は、貨幣の生成を理論化することを中心課題の一つにしている。『資本論』を読んだことのある読者は誰も、『資本論』は、決して、貨幣生成を論証できていない、が、『資本論』を手がかりにすれば、貨幣発生を解けるのではないかと、つい思い込んでしまうだろう。難解だが説得力があり、かつ密度の高い内容を含んでいるからである。

本稿は、貨幣発生を論証しようとするものではない。その前段階として、貨幣発生を論証する上で、価値形態論が有している積極的意義を明らかにすることを意図している。価値形態論がもつ方法的卓越性、貨幣形成に向かう強烈的な指向性を示すことをめざしている。

商品、価値形態、物象化、貨幣等、『資本論』の冒頭部分は、研究対象のハイライトをなしてきた。価値形態だけに限っても、久留間・宇野論争をはじめとして、膨大な研究業績が蓄積されている。しかし本稿は、『資本論』再解釈を志向しており、研究者諸氏の優れた論考を全て無視している。というのは、半ば、参考資料の膨大さに絶望し、半ば、余計な「雑音」に足元をすくわれてミイラ取りがミイラになることを避けたい、という思いがあるからである。したがって、貴重なヒントを見逃しているのではないか、という恐れは拭いきれない。また、抽象的労働の問題や労働の二重性に関する言及等、価値形態研究の定番ともいうべき側面が手薄になっている。筆者としては、それらを軽視するつもりは毛頭ないが、課題の性質上、やむをえないところもある、と考えている。⁽¹⁾

2 簡単な価値形態と「直接的交換可能性」

「直接的交換可能性」という言葉は、『資本論』における価値形態論の動的性格を一言で示す表現であるように思われる。というのは、次のように考えられるからである。

「直接的交換可能性」、あるいは、「直接的交換可能な形態」とは、互いに交換され合う二商品のうちで、等価形態の側にあるとされる商品に与えられる性格である。この性格づけをする主体は、等価形態の対極、相対的価値形態にあるとされる商品である。相対的価値形態にある商品が、等価形態にある商品を、自己に対して直接に交換可能な状態にする、というものである。しかし、商品が商品に対して性格づけをするわけがない。相対的価値形態にある商品の背後には、諸商品に対する欲望、しかも他人の商品の使用価値に対する欲望、したがってまた、交換欲求、をもつ所有者が控えていることはいうまでもない。したがって、この商品所有者の意志が、相対的価値形態の商品を介して、等価形態にある商品の性格を規定している、と見なければならない。

そこで、一種類の商品のみが等価形態にあり、他の全ての種類の商品が相対

的価値形態にある状態（すぐ後述の一般的価値形態＝形態Ⅲ）を想定すると、
こういえる。

この等価形態にある一種類の商品（等価物）は、他の全ての種類の商品に対して、直接に交換可能な状態にさせられている商品である、つまり、絶対的に譲渡されうる商品（＝貨幣商品）である、と。また、貨幣を発生させた動因は、貨幣商品を除く全ての種類の商品の所有者たちの意志であり、行為である、と。

個々の商品所有者たちの欲望や意志、行動が、結果的に貨幣発生の推進力になっているとすれば、貨幣生成を指向する価値形態論の積極的意義は、あまりにも明らかであろう。

さしあたり以下では、キーワード・「直接的交換可能性」を中心に、『資本論』の中の基礎的叙述を少し詳しく見て、内容を確認し、若干の解釈・検討を加えたい。

周知のように、『資本論』には三つのタイプのモデル化された価値形態が取り上げられている。すなわち、「簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」（形態Ⅰ）、「全体的な、または展開された価値形態」（形態Ⅱ）、「一般的価値形態」（形態Ⅲ）である。三つのタイプは、それぞれ独自の相対的価値形態および等価形態の緊張関係によって構成されている。以下では、基本タイプである形態Ⅰを取り上げる。形態Ⅱおよび形態Ⅲは、形態Ⅰの組み合わせまたは合成によって構築されたものである。特に、形態Ⅲは事実上の貨幣形態である。『資本論』では、歴史的にも論理的にも、商品関係の発展とともに、形態Ⅰ→形態Ⅱ→形態Ⅲ、へと進展するものとされている。筆者は論理上の順序づけを重視するものの、この立場に特に異論をもっているわけではない。

ところで、価値形態とは、価値の現象形態、あるいは、表現様式のことである。すなわち、商品に内在し、そのものとしては直接見ることができない商品価値が、目に見える形をとって現れ出た姿、あるいは、そのような事態を意味する。周知のように、『資本論』は、商品が使用価値と交換価値をもつものとして、議論を展開し始める。ある商品と他商品との交換比率である交換価値は、

価値形態と同義である。

ところが、価値形態は決して一様の意味だけをもつのではない。①相対的価値形態と等価形態との緊張関係によって構築される、上述の三タイプとしての価値形態を意味する場合がある。②相対的価値形態のみ、あるいは、③等価形態のみを意味する場合もある。それぞれに価値形態と呼ばれるもっともな理由があるのであるが、文脈によって、使い分けを識別する必要がある。このことは、間もなく明らかになるはずである。

さて、形態Ⅰは、設例として周知の等式と命題を用いて、その構造が説明される（第1巻・第1章「商品」・第3節「価値形態または交換価値」・「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」・「1 価値表現の両極—相対的価値形態と等価形態」）。

「x 量の商品 A = y 量の商品 B または x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する。

（20エレのリンネル=1着の上着 すなわち、20エレのリンネルは1着の上着に値する）」。（S.63）

いうまでもなく、等式の左辺にくる商品（Aまたはリンネル）が相対的価値形態にあるとされ、右辺に位置する商品（Bまたは上着）が等価形態にあるとされる。20エレのリンネルは1着の上着に値すると言明され、リンネルの価値が、交換相手側商品の使用価値・上着で表現される事情が説明されるが、『資本論』のこの箇所は擬人化的手法で叙述される。商品（リンネル）が主語にされる。

「リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料として役立っている。第一の商品は能動的役割を演じ、第二の商品は受動的役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表されている。すなわち、この商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能する。すなわち、等価形態にある」。（S.63）

リンネルの価値が上着（の使用価値、現物形態）として表現される。上着と

して現象するのではない。リンネルが自らの価値を、上着を材料にして、表現する・現象させる、のである。リンネルが主語であるだけでなく、交換関係を主導するものとしても位置づけられている。後に明らかにしたいが、この視点は重要な意味をもつ。

次いで、両形態の相互依存的緊張関係が述べられる。両形態の関係とともに、それぞれの役割の違いが、さらにはっきりする。

「相対的価値形態と等価形態とは、互いに依存し合う、互いに制約し合う、不可分の、契機であるが、同時に、互いに排除し合う、あるいは対立し合う、…両極である。それらは、常に、この価値表現によって互いに関連させられる…異なった商品に配分される。…リンネルの価値は、ただ相対的に、すなわち他の商品でしか、表現されえない。それゆえ、リンネルの相対的価値形態は、何かある他の商品がリンネルに対して等価形態にあることを前提する。他面、等価物の役をつとめるこの他の商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表現するのではない。それは、他の商品の価値表現に材料を提供するだけである」。(S.63)

上の引用から、価値形態の三様の意味が明らかになる。

両形態の、異なった役割を担いながらも相互依存関係によって成り立つ、価値表現の構造自体が、まず、価値形態といわれる (①)。三つのタイプの価値形態がこれにあたる。

ところが、20エレのリンネル=1着の上着、という等式は、リンネルの価値を相対的に（つまり上着で）表現している。示されているものの中身は、相対的価値形態に位置する商品の価値である (②)。ある商品の他商品との交換比率、という場合の、ある商品の交換価値（＝相対価値）は、②の意味での価値形態である。

しかし、材料にされているとはいえ、目に見えるもの（形態）として姿を見せているのは上着（＝等価形態）の方であり、価値形態は上着である、ともいえる (③)。貨幣が価値形態（「諸商品の自立的な価値形態」S.156）であるとい

われるのは、③の意味においてである。

いずれの意味においても、価値形態は、商品と商品との関係としてしか表されえないことは確かである。

第1章・第3章・Aで展開される形態Ⅰは、「1 価値表現の両極—相対的価値形態と等価形態」の後、以下の順序で叙述されている。

2 相対的価値形態

a 相対的価値形態の内実

b 相対的価値形態の量的規定性

3 等価形態

4 簡単な価値形態の全体

「直接的交換可能性」という表現が登場するのは、「3 等価形態」においてである。しかし「2 a 相対的価値形態の内実」における考察は、「3」を理解するための重要な前段階をなしている、と考える。だから、「3」を見る前に「2 a」をひとまず見ておく必要がある。また、「3」における「直接的交換可能性」の内容の吟味は、われわれを再び、相対的価値形態に関する叙述（「1」や「2 a」）の検討の場に連れ戻すことになるであろう。

さて、価値形態の内実はどのように論じられるのであろうか。「2 a」冒頭では、まず、続く「2 b 相対的価値形態の量的規定性」の視点に安易に陥ることが、戒められる。

「ある一つの商品の簡単な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにどのように潜んでいるかを見つけ出すためには、その価値関係を、さしあたりその量的関係から全く独立に、考察しなければならない。人は、たいてい、これと正反対のを行っており、価値関係のうちに、二種類の商品の一定分量どうしが等しいとされる割合だけを見ている。その場合、見落とされているのは、異なった物の大きさは、それらが同じ単位に還元されて初めて、量的に比較されるものとなるということである。

…リンネルと上着とは、価値の大きさとしては、同じ単位の諸表現であり、

同じ性質の物であるということを、常に含んでいる。リンネル=上着が等式の基礎である」。(S.64)

「同じ単位」として、使用価値一般（社会的に評価された意味での）ではなく、社会的実体としての労働・抽象的人間的労働の凝固体（＝対象化された抽象的人間的労働）が剔出される。何故なら、私的所有の対象として有意義な使用価値、大量現象として現れ、社会性をもつ使用価値は、結局のところ、労働に媒介された使用価値（＝労働生産物）に帰着するからである。また、一回限りの交換ではなく、持続的な商品交換が想定されているからでもある。交換の継続性の前提に生産、したがって、社会的分業の存在ということも、考察の重要な環として取り込まれていることはいうまでもないであろう。

リンネルと上着とは、質的に異なる、つまり、使用価値が異なるから交換される。だがその際、交換基準こそ重要であって、交換比率の詮索は、さしあたりどうでもよい、というのである。「20：1」を云々する前に、「エレ」と「着」が同質化される機構を見抜かなければならない、同質化されてはじめて、「20：1」が問題になりうる、というのである。この洞察は極めて重要である。貨幣の存在を当然視し、貨幣が存在しない世界を見たことがないわれわれには、事の重要性になかなか気づき難いところがある。貨幣が存在しない次元で貨幣の発生を展望する際には、この観点が繰り返し考慮されなければならない。

「しかし、質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現されうる。では、どのようにしてか？ リンネルが、その『等価物』としての、またはそれと『交換されうるもの』としての上着に対してもつ関連によって、である。この関係の中では、上着は価値の実存形態として、価値物として通用する。何故なら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである。他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる。すなわち、一つの自立的な表現を受け取る。何故なら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価物のものとしての、またはそれと交換されうるものとしての上着に関連しているからである」。(S.64)

「直接的交換可能性」の一手手前まで論じられている。否、「3」での「直接的交換可能性」に関する叙述を踏まえて検討すると、実は、ここの引用箇所が「直接的交換可能性」の内容に大に関わっている。したがって、価値形態論の積極的意義を理解する上でのキーポイントの一つをなしている箇所でもある。ここで事実上「直接的交換可能性」が語られていることになるのだが、この点は、行論のうちに明らかになるであろう。上の引用箇所については、さしあたり、次のように、一步踏み込んだ理解をしておきたい。

まず、「等価物」が「交換されうるもの」と同義に使われていることに注意しておきたい。価値や価値形態は、交換なしには考えられない。独立した人格どうしが生産物を交換するのであるから等価交換であり、「等価物」が「交換されうる」。当然といえば当然である。この二つの言葉は、置き替え可能なのである。『資本論』の価値形態論では、価値「表現」や価値「尺度」が前面に出る反面、商品「交換」や商品「流通」が後景に退きすぎる傾向があるように思われる。このことも後に明らかにされるであろう。

リンネルの価値関係の中では、上着は「価値の実存形態」、「価値物」として通用する。他方、リンネルには、リンネル自身の「価値存在」、つまり、使用価値・上着という「自立的な表現」が現れてくる。要するに、形態Ⅰというシンプルな関係の中でさえ、上着という自然形態が、リンネルにとっては、自立した価値であり、貨幣（等価であり、交換されうるもの）なのである。

「直接的交換可能性」に関わって「2 a」を以上のように把握するとして、次に「3等価形態」では、どのようにして、等価物に「直接的交換可能性」という性格が与えられるのであろうか。

「われわれは次のことを見てきた。——商品A（リンネル）は、その価値を種類を異にする一商品Bの使用価値（上着）で表現することによって、商品Bそのものに、一つの独自の価値形態、等価物という形態を押しつける。リンネル商品は、上着が、その身体形態とは異なる価値形態をとることなしに、リンネル商品に等しいとされることにより、それ自身の価値存在を外に現わす。

したがって、リンネルは、事実として、上着が直接にリンネルと交換されうるものということによって、それ自身の価値存在を表現する。したがって、一商品の等価値形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態なのである」。(S.70)

「直接的交換可能性」という言葉がはじめて現れる箇所である。ここで「直接的」といわれる理由が、上着が「その身体形態とは異なる価値形態をとることなしに」＝他の価値物に変換されることなしに＝上着の現物形態のままで、という意味であることがわかる。「直接的交換」に対置される概念は「間接的交換」である。それは、他者に媒介された交換＝貨幣に媒介された交換、にはかならない。確かに貨幣は、全ての商品に対して、直接に交換可能である。それゆえ、「直接的交換可能性」は、貨幣生成を志向し、貨幣への意識が込められた表現である、と見ることができる。上の引用以降、この表現がしばしば使われるようになる。そして、「貨幣」と読み替えてもさしつかえないケースも存在する。

「2 a 相対的価値形態の内実」で事実上「直接的交換可能性」が語られているのに、「3 等価値形態」に至るまでこの表現が使われなかったのは何故であろうか。「2 a」では、価値形態の量的規定性に安易に踏み込むことを戒めながら、質的規定性のみが論じられた。しかしそれだけでは、リンネルに対して上着が価値物として通用するには十全でないと考えられたからであろう。「2 b 相対的価値形態の量的規定性」の基本観点を踏まえておく必要があったのである。

「…価値形態は、単に価値一般だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない。それゆえ、商品Bに対する商品Aの、上着に対するリンネルの、価値関係においては、上着という商品種類は、単に価値一般として、リンネルに量的に等置されるだけではなく、一定分量のリンネル、例えば20エレのリンネルに対して、一定分量の価値体または等価値物、例えば、1着の上着が等置されるのである」。(S.67)

さらに次のことも踏まえておく必要があった。リンネルと上着の等式の前提に、同じ量の価値実体が潜んでいる。リンネルと上着の価値の変動は、それぞれの生産に関わる生産力に依存する。だから、諸生産力の変動は、価値の大きさの相対的表現に異なった影響を与えうる。以上のことである。(S. 67—68)

「3」の引用文では、等価形態＝「直接的交換可能性の形態」が結論にされているだけで、一見したところでは、どのようにして等価形態に「直接的交換可能性」の性格が与えられているのか、わかりにくい。しかし、次のようにいわれている。すなわち、リンネルは、上着がその使用価値の姿のままでリンネルと等しいとされることにより（＝上着が直接にリンネルと交換されうるものということにより）、リンネル自身の価値存在を現わす（＝表現する）、と。ここでは、先に注意を喚起しておいたように、言葉の置き替えが行われているのである。すなわち、「等しいとされる」（＝等置される）が「交換されうる」（＝交換可能である）に言い換えられているのである。したがって、上着がリンネルに等しいとされることが、上着がリンネルに対して交換可能な形態にされることなのである。

冒頭部分で、等価形態が「直接的交換可能性の形態」と規定された後、「3」では、等価形態の三つの独自性、すなわち、①使用価値がその反対物の、価値の現象形態になること、②具体的労働がその反対物の、抽象的人間的労働の現象形態になるということ、③私的労働がその反対物の形態、直接に社会的な形態にある労働になるということ、が明らかにされていく。

「4 簡単な価値形態の全体」では、まず、商品に内在するのは使用価値と交換価値ではなく、正確には、使用価値と価値であったことが確認される。次に、形態Ⅰが、商品に内在する使用価値と価値が、相対的価値形態と等価形態として、外的に現れ出た簡単な現象形態であること、商品形態の発展が価値形態の発展と一致すること、等が指摘された後、「簡単な価値形態、すなわち、一連の変態を経て初めて価格形態に成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである」、とされ、形態Ⅱの展開のための諸設定が準備される。

『資本論』の形態Ⅰに関する考察を、「直接的交換可能性」を中心に、以上のように理解したとして、ここに二つの疑問が生じてくる。

一つはこうである。リンネルは、上着が現物形態のままでリンネル自身に等しいとされることによって、上着に、リンネルとの「直接的交換可能性」の性格を与える、という場合、上着がリンネルに等しいとされるメカニズムは何なのか、ということである。否、メカニズムなどではなくて、どういう考察が必要で、視野をどうズラすべきか、ということかもしれない。20エレのリンネルと1着の上着が等しいものとして交換されることは、貨幣がまだ存在しない世界でも、日常的にありうるであろうと簡単に想定できる事態である。いわば「事実」である。また、量的に等しいことの客観的基礎は社会的実体によって与えられている。だから、問題は、異質なものを等置して量的に比較しうるものにする関係である。しかも、互いに同等な関係ではなく、能動的な役割と受動的な役割に分けて、一方が他方を等しいものとして関係させる関係である。関係させる側の論理、相対的価値形態の内実が、さらに吟味されなければならないであろう。

もう一つの疑問は、価値形態の展開に、何故、言葉の置き替え・言い換えが多いのか、ということである。これは、角度を変えて検討しながら、一步步、考察を確かめ、深めていく方法に起因すると思われる。その最たるものが、主語を物に移動させて叙述する手法であろう。商品が主語にされ、商品の精神（頭脳）が商品（身体）を動かす。叙述は、商品が、自己の論理で運動する過程として描かれる。商品の視線からの内容になる。人の視線と商品の視線を調和させるために、言い換えが多くなるのかもしれない（交換＝等置＝表現）。この方法は、社会現象を静態的なものとしてではなく、運動として捉えることに適した手法でもある。

二つの疑問が生ずる源は一つであると思う。商品、あるいは、価値を主語として展開される価値関係の質的規定性の場面が、やはりもう一度、検討されなければならないだろう。

3 価値形態の発展と価値表現

『資本論』の価値形態の叙述は、形態Ⅰ→形態Ⅱ→形態Ⅲ、へと展開される。その際、叙述展開の推進力になるのが、商品の精神（＝価値）である。商品に内在する価値が、その精神（＝概念）にふさわしい姿を表わすまで、低次の価値形態のタイプからより高次の価値形態のタイプへと、自己展開を続けていく過程として、描かれる。価値概念に照らして、低次の表現タイプの欠陥が指摘され、高次のタイプの普遍性・統一性が強調される。次のように説明される。まず形態Ⅰについて。

「ある一つの商品Bでの表現は、商品Aの価値をただ商品A自身の使用価値から区別するだけであり、それ故また、商品Aを、それ自身とは異なる何らかの個々の商品種類に対する交換関係に置くだけであり、商品Aの他の全ての商品との質的同等性および量的比例関係を表わすものではない」。(S.76)

「…個別的な価値形態は、おのずから、それよりも完全な一形態に移行する。…商品Aが他のあれこれの商品種類に対して価値関係に入るのに従って、同一の商品のさまざまな簡単な価値表現が生じる。商品Aの可能な価値表現の数は、商品Aと異なる商品種類の数によって制限されているだけである」。(S.76)

形態Ⅱは次の等式群で示されるように、1種類の商品が、他の全ての商品種類を等価形態に置く。

「 z 量の商品A = u 量の商品B または = v 量の商品C または = w 量の商品D または = x 量の商品E または = 等々

(20エレのリンネル = 1着の上着 または = 10ポンドの茶 または = 40ポンドのコーヒー または = 1クォーターの小麦 または = 2オンスの金 または = $1/2$ トンの鉄 または = x 量の商品A または = 等々)」。(S.77)

上の設例では、例えばリンネルは、他の全ての商品で表した、(無限に) 多重の相対的価値(=多重価格)をまとっている。以下の諸引用文で「無限の列」、「無限の一系列」と叙述されるのは、この意味である。設例の諸等式が言明する、20エレのリンネルは「あれか、これか」に値するは、事実上、20エレのリン

リンネルは「あれにも、これにも」値するを意味する。したがって、形態Ⅱの価値表現タイプとしての高次性は、次のようにいわれる。

「ある一つの商品、例えばリンネルの価値は、今や商品世界の無数の他の要素で表現されている。他の商品体はどれもリンネル価値の鏡となる。こうして、この価値そのものが、初めて真に、区別のない人間的労働の凝固体として現われる。…リンネルはその価値形態によって、…商品世界に対して社会的関係に立っている。商品としては、リンネルはこの商品世界の一市民である。それと同時に、商品価値の諸表現の無限の列のうちには、商品価値はそれが現われる使用価値の特殊な形態には無関心であるということが示されている」。(S.77)

「20エレのリンネル=1着の上着」という第一の形態においては、これらの二つの商品が一定の量的比率において交換されうるものだという事は、偶然的な事実でありうる。これに対して、第二の形態においては、偶然的な現象とは本質的に区別され、それを規定する一つの背景が、直ちに透けて見えてくる。…交換が商品の価値の大きさを規制するのではなく、逆に、商品の価値の大きさが商品の交換比率を規制するということが明白になる」。(S.78)

価値の普遍性、抽象的人間的労働の無差別性をよりの確に表現する形態である、というのである。確かに、価値表現としてはその通りであろう。

しかし、商品交換の側面から見ると、このタイプは問題をはらんでいる。

リンネルは他の全ての商品を等価形態に置く。ということは、全ての他商品は、リンネルに対してだけ、直接的交換可能な形態にあることになる。全ての商品がリンネルに対してだけ、価値として自立し、貨幣のように見える。そこで、逆説的だが、次のようにいえることになる。すなわち、リンネルを介して、他商品は全て、相互に交換可能になる、と。『資本論』では、貨幣発生が立証されるまでは、間接的交換の考察が方法的に封じられているのであろう。しかし、リンネルが、単に多くの商品とではなく、他の全ての商品と交換されているという事実または想定がなければ、形態Ⅱは存立しようがない。それだけではない。論理的には、他のどの一商品も、リンネルと同じように、相対的価値形態

の位置に立つことが可能だと想定できる。そうすると、任意の一商品は、他のどの商品とも、直接的に交換可能な状態にあることになる。つまり、形態Ⅱの「商品世界」では、貨幣の発生が止揚された状態になっているのではないだろうか、という問題が生ずる。

形態Ⅰと形態Ⅱの歴史的被制約性については次のように述べられている。すなわち、形態Ⅰが「…実際に現われるのは、明らかに、ただ、労働生産物が偶然的な時折行なわれる交換によって商品に転化されるそもそもの始まりにおいてだけである」(S.80)が、「展開された価値形態が、初めて実際に現われるのは、ある労働生産物、例えば家畜が、もはや例外的ではなく既に慣習的に、他のさまざまな商品と交換される時である」(S.78)と。

とすると、多彩な生産物種類の大きな部分が「偶然的な」交換か、または、共同体の自給自足的分業圏に吸収され、小さく限定された「商品世界」が現われたにすぎないように見える。形態Ⅱにおける価値表現の普遍性・無差別性の意義づけも、相当割り引かれねばならないだろう。

筆者は、形態Ⅱの設例に関して、リンネルに、全ての他商品との関係を結ばせるべきではない、と考える。しかし、貨幣発生を考察する場合、形態Ⅱのような直接的生産物交換の場面、つまり、「形態Ⅱ型」の交換モデル、が不可欠だと考えている。

形態Ⅱの欠陥については次のようにいわれる。未完結、不統一、複雑だというのである。

「第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。…一つの価値等式が他の価値等式と作る連鎖は、新しい価値表現の材料を提供する新種の商品が登場するたびに、それによって絶えず引き続き延長されうものである。第二に、この連鎖は、バラバラな、さまざまな種類の価値表現の雑多な寄木細工をなしている。最後に…どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも異なる価値表現の無限の一列である」。(S.78-79)

形態Ⅲは、形態Ⅱを、一旦、無数の形態Ⅰに分解し、これらの形態Ⅰの諸等

式の左右両辺を入替え、そのまま諸等式を組み合わせる（寄せ集める）、という手続きで作成される。次の図が示される。

$$\begin{array}{lcl}
 1 \text{ 着の上着} & = & \\
 10 \text{ ポンドの茶} & = & \\
 40 \text{ ポンドのコーヒー} & = & \\
 1 \text{ クォーターの小麦} & = & \\
 2 \text{ オンスの金} & = & \\
 1/2 \text{ トンの鉄} & = & \\
 x \text{ 量の商品 A} & = & \\
 \text{その他の商品} & = &
 \end{array}
 \left. \vphantom{\begin{array}{l} 1 \text{ 着の上着} \\ 10 \text{ ポンドの茶} \\ 40 \text{ ポンドのコーヒー} \\ 1 \text{ クォーターの小麦} \\ 2 \text{ オンスの金} \\ 1/2 \text{ トンの鉄} \\ x \text{ 量の商品 A} \\ \text{その他の商品} \end{array}} \right\} 20 \text{ エレのリンネル}$$

(S.79)

形態Ⅲでは、価値表現としての一般的性格が強調される。

「商品は、それぞれの価値を、今や(1)簡単に表わしている。何故なら、ただ一つの商品で表わしているからである。かつ(2)統一的に表わしている。何故なら、同じ商品で表わしているからである。諸商品の価値形態は、簡単かつ共同的であり、それ故一般的である」。 (S.79)

共通の等価物・リンネルが貨幣である、と分析されていく。

「新しく得られた形態は、商品世界の諸価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、例えばリンネルで表現し、こうして、全ての商品価値を、それらの商品のリンネルとの同等性によって表わす。…この形態が初めて現実的に諸商品を互いに価値として関連させ、言い換えれば、諸商品を互いに交換価値として現象させる…。 (S.80)

「商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から排除された等価物商品であるリンネルに、一般的等価物という性格を押しつける。リンネル自身の自然形態がこの商品世界の共通な価値姿態であり、したがって、リンネルは、他の全ての商品と直接に交換されうるものである。リンネルの身体形態が、一切の人

間的労働の目に見える化身、一般的社会的蛹化、として通用する」。(S.81)

鋭い分析に基づく叙述が続くが、いずれも価値表現の視点からのものである。しかも、出来上がった形態Ⅲから眺めた叙述である。どのようにして形態Ⅲが形成されるのかが述べられていない。よく引き合いに出される次の引用文も、決して貨幣生成の道筋を展開したものにはなっていない。

(形態Ⅰの場合も形態Ⅱの場合も)「どちらの場合にも、自分自身に一つの価値形態を与えることは、いわば個々の商品の私事であり、個々の商品は他の諸商品の関与なしにそれを成し遂げる。他の諸商品は、その商品に対して、等価物という単に受動的な役割を演じる。これに対して、一般的価値形態は、商品世界の共同事業としてのみ成立する。一商品が一般的価値表現を獲得するのは、同時に他の全ての商品がそれらの価値を同じ等価物で表現するからに他ならず、そして、新しく登場するどの商品種類もこれにならなければならない」。(S.80-81)

しかし、形態Ⅲにおいても、まだ出来上がったばかりで貨幣の相対的に独自の機能が作動し始める前の段階では、形態ⅠやⅡの場合と同じく、等価物は「単に受動的な役割を演じる」だけのものだと見なければならない。それにもかかわらず「新しく登場するどの商品種類もこれにならなければならない」(＝リンネルで価値表現しなければならない) ようになるのである。「共同事業」は、諸商品の運動の結果であって、原因ではない。

「リンネルに等しいものという形態で、今や全ての商品が質的に等しいもの、すなわち価値一般として現われるだけでなく、同時に、量的に比較されうる価値の大きさとしても現われる。全ての商品がそれらの価値の大きさをリンネルという一つの同じ材料に映すので、これらの価値の大きさは互いに反映し合う。例えば、10ポンドの茶＝20エレのリンネル であり、40ポンドのコーヒー＝20エレのリンネル であれば、10ポンドの茶＝40ポンドのコーヒー である。…」(S.81)

形態Ⅲでは商品交換のパターンが根本的に変化させられてしまう、という認識が欠けているように思われる。この点の諸考察は、第3章「貨幣または商品流通」・第2節「流通手段」・「a 商品の変態」の箇所に、移動させられてい

るように見える。上の引用文も、もっぱら、価値表現の一般性という視点からのものである。形態Ⅲでは何故、「10ポンドの茶=20エレのリンネル」、「40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル」という形の交換しか行われぬのか。「10ポンドの茶=40ポンドのコーヒー」という交換が、何故否定されるのか。このような視点からも問題が立てられるべきであった、と考える。

4 同等性関係

前述のように、簡単な価値形態から貨幣に至るまで、タイプとしての価値形態の発展を推進したのは、商品、しかも商品に内在する価値であった。商品関係の発展とともに価値関係も展開し、価値概念にふさわしい価値表現、貨幣形態に達するまで、価値形態が自己展開していく、というものであった。いわば、普遍性・無差別性としての価値表現を目的とする自己展開である。価値関係の量的側面に惑わされず、質的規定の分析に内在するには、所有者から商品そのものからへと、視界をズラした方が効果的だったのである。

しかし、商品関係、価値関係は社会的関係であり、価値、あるいは、商品が自己運動するはずがない。商品を動かしているのは、商品所有者である。所有者たちの、商品を媒介とする諸行動の絡み合いの反映が商品や価値の自己運動として現れる、と見るべきであろう。だから、目的化された価値表現ということも、商品所有者の諸欲望や諸動機、したがって、諸行動と整合性をもつ限りでのみ、説得力をもつといえるだろう。

ところで、商品所有者は、自己の商品の価値を表現することに直接的関心をもつであろうか。否、価値表現それ自体には関心がない、それどころか、自己の商品の使用価値にすら直接的関心がない、といわなければならない。彼の欲望の対象は、他人が所有する商品の使用価値である。「彼にとってそれは、直接的には、ただ交換価値の担い手であり、それ故、交換手段であるという使用価値をもっているだけである。だからこそ、この商品を彼は自分を満足させる使用価値をもつ商品と引き換えに譲渡しようとする」(S.100)。だから、所有者

の立場からは、交換（欲望）と価値表現との間に、何がしかの距離がある。

所有者は、交換目的でのみ自己の商品に関心を払う。しかし、交換が成立するためには、相手の同意が必要である。すなわち、交換においては、自己の所有物を「…商品として互いに関連させるためには、商品の保護者達は、その意思をこれらの物に宿す諸人格として互いに関係し合わなければならない。それ故、一方は他方の同意の下にのみ、従ってどちらも両者に共通な一つの意味行為を媒介としてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする。だから、彼らは互いに私的所有者として認め合わなければならない」(S.99)。

交換は相互行為ではあるが、行為であることには違いなく、行為対象、すなわち、他者、あるいは、物への働きかけという側面をもつ。しかも、所有者は、自分の商品については、全面的に支配力を及ぼすことができる。他者、あるいは、自分の商品を介しての他人の商品、への働きかけという側面が、交換（欲望）と価値表現とを媒介する契機をなす、と考える。ここでわれわれは、相対的価値形態の内実には、もう一度立ち返ることになる。しかも商品所有者を意識しながら。そこでは、価値関係の質的規定性が強調され、リンネルに對置される上着は、「等価物」または「交換されうるもの」とであると、並列的に述べられるにとどまっていた。

まず、価値関係の質的規定性について検討したい。『資本論』初版での展開が適切なヒントを与えてくれる。「第1章（1）への付録」・「2 相対的価値形態」では、「a 同等性関係」としてタイトル化されているのであるが、リンネルの上着への同等性の関係づけが述べられている。

「自分の価値を表現しようとするものはリンネルなのだから、リンネルの方からイニシアティブは出ている。リンネルは、上着に対して、…ある関係に入る。この関係は等置の関係である。20エレのリンネル＝1着の上着　という表現の基礎は、事実上、リンネル＝上着　であって、これは、言葉で表わせば、ただ、商品種類上着は、自分とは違う商品種類リンネルと同じ性質のもの、同

じ実体のものである、ということではない」。(『初版』 S.629)

同等性＝等置 である。ここでは、自己の価値を表現することの基礎に（つまり、前段階として）、リンネルが上着に対して、等置の関係づけをする、という趣旨が述べられている。関係づけをするリンネルを、リンネル所有者と読み替えても、何ら不自然さはない。というのは、関係づけるのは所有者の方であり、それを商品自身の行動として見直しただけだからである。主語を移動させても、主語・商品の価値表現行動の基礎に、主語・所有者の、商品を介しての、他者への関係づけの行為があるという前後関係は、変わりようがない。商品交換行為の一つである、他者（の商品）への働きかけとは、このような「関係づけ」のことなのである。このことは、価値形態論において、極めて重要である。

先に疑問として提起した問題、すなわち、異質なものの同質化の問題、上着がリンネルに等しいものとされるメカニズムは、人から物へと主語の入れ替えを可能にしながら、リンネル（所有者）の上着（所有者）への同等性関係として、等置の関係づけの行為として、捉えられていることにある。この行為が、リンネル＝上着 をもたらず、とされるのである。このような関係づけの基礎には、商品交換という客観的事実がある。商品交換は、リンネルと上着の、双方向からの、互いに相手に立ち向かう行為である。価値形態論は、双方向の行為である交換という現実の事態から、一方向の行為のみを「関係づけ」として抽出し、理論化したものである。所有者双方の行為を、商品・リンネルの行動として、捉え返したものである。だから、上の等式を支える同質化されたもの・同じ単位・共通の実体は、リンネルの側の一方的な、主観的な事情のみに基づくのではなく、社会的な諸関係・諸事情に基づいて、客観的に定まるのである。

次に、何故、等置＝交換可能、あるいは、等価物＝交換可能なもの なのだろうか。先に見たように、現行版『資本論』・「2 a 相対的価値形態の内実」や「3 等価形態」では、自明の理であるかのように、等価物＝交換可能なものとされていた。

われわれは、通常、次のように思うだろう。すなわち、リンネルと上着とは、双方の所有者にとって交換可能だったからこそ、交換が成立したのではないかと。この交換という事実を基礎に、われわれは交換関係の中に分け入り、しかもリンネル商品になりきって、上着との関係を分析した、その結果、リンネルが自らの価値を表現することの基礎に、上着に同等性の関係づけをしているということがわかった、と。この関係づけが、どうして、上着にリンネルとの交換可能な性格を与えることになるのか、と。つまり、交換という事実を基礎に分析を進めたのに、何でいまさら、交換可能性が問題になるのか、と。

現行版『資本論』の立場は、初版でも同じである。初版『資本論』の「付録」・「(3) 等価形態」・「a 直接的交換可能性の形態」では、やや詳しく、次のように述べられている。

「諸価値としては、全ての商品は、同じ単位の、すなわち人間労働の、同等と認められる、互いに置き換えられる、すなわち交換可能な諸表現である。それ故、ある商品が、一般に他の商品と交換されうるのは、その商品が価値として現れるような形態をもっている限りにおいてのことである。ある商品体が他の商品と直接に交換されうるのは、その商品体の直接的な形態、すなわちそれ自身の物体形態または現物形態が、他の商品に対して価値を表している、すなわち、価値姿態として認められている限りにおいてのことである。このような属性を上着は自分に対するリンネルの価値関係においてもっている」。(『初版』S.631)

価値表現の基礎に、同等性（等値）の関係づけがあった。交換という事実を基礎に交換関係・価値関係を分析し、同等性関係（リンネルの側からは関係づけ）というキー概念を得たのであるが、この関係は、実は、交換の存立を左右する屋台骨でもあったのである。同等性ということがなければ、交換は存在し続けられない。同等性は、正確には先に見たように、同質性である。だから、リンネルが上着を関係づけるという場合、それは、分析によって一旦分断した交換関係を再構成する試みである、ともいえる。関係は相互的であるから、リ

リンネルの側からの働きかけだけでは、関係は成り立たない。上着の側の反応を待たなければならない。リンネルは上着に可能性を与えるのである。ところで、リンネルから発せられて上着に与えられる交換可能性とは、何であろうか。交換可能性とは、事実上、上着のリンネルに対する交換力である。アダム・スミス流に言えば、交換力＝支配力＝購買力 である。リンネルのイニシアティブは、上着にリンネルへの購買力を与えるのである。だから、リンネルの関係づけの行動は、上着を、リンネルに対する「貨幣」にするのである。

価値形態論では、人から物（リンネル）に主体が移され、リンネルの価値表現行動が考察の焦点にされた。商品関係の発展をリンネルの価値表現のための自己運動として描くことと、量的関係に引きずられないようにするためか、人（リンネル所有者）の観点からの言及は、極力封印されていたように思われる。しかし、商品の唯一の社会的関係は交換である。交換の考察に際しては、価値だけでなく、使用価値も考慮されなければならない。価値の観点、商品を主語にする分析だけでは、交換には、捉えきれないものがある。リンネルは、価値としては、リンネル以外のあらゆる商品と交換される。しかし、リンネル所有者が商品・リンネルを手放すのは、自分の気に入った商品を、引き換えに、取得できる場合だけである。交換の考察には、商品所有者の欲望や交換意志が、不可欠の要因をとして、考慮されなければならないであろう。

「20エルのリンネルは1着の上着に値する」は、価値関係の分析のためには、与えられた事実、関係づけの分析への出発点である。しかし同時に、リンネルの所有者にとっては、関係づけの意志、交換意志の、言明であるとも解釈できる。上着の所有者がこの申し出を受ければ、リンネルの所有者は、現実にはリンネルを譲渡しなければならない。重要なのは、交換成立のためには、まずもって、リンネルの上着に対する欲望（社会的需要）と交換意志の存在が不可欠である、ということである。価値表現の基礎に関係づけの行動や交換（契約）という事実があるとすれば、そのまた基礎に、交換意志、さらにその前提に、他人の生産物に対する欲望等、次々に遡及できる主体的推進力が存在するのであ

る。

リンネルの所有者は、交換の前に、リンネルを上着に関係づける。しかし、交換意志の言明自体は、必ずしも交換成立に結果するわけではない。だが、今、問題にしているのは、(直接的生産物) 交換に結実する意志である。交換の前に存在している交換意志をめぐる状況は、次のようなものであろう。

「…リンネル生産者Aと上着生産者Bとの間の取引を考えてみよう。彼らが取引で一致する前には、Aは、20エレのリンネルは2着の上着に値する(20エレのリンネル=2着の上着)、と言い、これに対して、Bは、1着の上着は22エレのリンネルに値する(1着の上着=22エレのリンネル)、と言う。最後に、長い間商談したあげく、彼らは一致する。Aは、20エレのリンネルは1着の上着に値する、と言い、Bは、1着の上着は20エレのリンネルに値する、と言う。…」(『初版』S.628)。

交換条件の契約が成立した後、商品が相互に譲渡されるだろう。上の場合、現実の交渉を主導したのが上着所有者(B)であったとしても、また、交換の実行前であるにしても、リンネルが上着に同等性の関係づけをし、上着は、リンネルに対する直接的交換可能性、すなわち、1着=22エレの割合でリンネルを取得する力を有している、といえるだろう。相互譲渡が実現するまでは、リンネル所有者の上着に対する熱い視線が続く。リンネルはいつでも提供できる態勢にある。所有権の及ばない上着に対して、リンネルの所有者ができることは、リンネルを譲渡できる態勢をとり続けることだけである。以上が、上着に与えられた直接的交換可能性の実際の在り様であろう。このような、交換が確実でありながら交換前であるという状態が、実は、形態Ⅰの設例に最も近いのだろう。リンネルの所有者側からの関係づけとして事態を見るということは、リンネル所有者の主観に即して見る、ということである。単なる駆け引きでない限り、上着への交換意志の言明は、実際の交換に結実しなかった場合には、交換可能性は消滅するのではなく、それは潜在化するだけだろう。

5 価値形態論の意義：結びにかえて

商品所有者たちの欲望は、交換を現実のものにしようと、自己の商品を相手側商品に対して、質的に同等なものとして、関係づけようとする。関係づけの意志は交換当事者の双方向から出ているが、これを一方向（リンネルの所有者）の側から切り取って見ると、こうなる。

リンネルの所有者は、上着の所有者に対して、言明した条件での交換経路を開けて待っている、と。交換の実現は上着の所有者の意志にかかっている、と。リンネルの所有者は、上着を需要するし、リンネルの所有権移動に何ら障害はない（＝非所有の上着に、交換可能性を与えた）、ということになる。

同等性の関係づけが、形態Ⅰのように、個々バラバラに発せられて、双方で、互いに向かう意志を打ち消し合えば、社会的に何の方向性も残らないだろう。しかし、小規模な形態Ⅲのような、等価物を共有化するような交換のパターンが生じれば、やがて、多数の関係づけの意志が一商品に集中する傾向が現れるだろう。個々の意志は私的で主観的であるが、一方向を指向する多数の意志行為が集積すれば、社会的な勢力になり、社会的に客観的な行為になるだろう。全商品が一商品に対してのみ交換可能になるということは、個人の力では左右できない、社会的・普遍的現象が生じた、と見なければならぬだろう。それによって構築される人為的建造物は、社会的な制度とみなされるだろう。

個々バラバラな関係づけの意志が一つの方向性をとる契機は、等価物の共有化にあるし、それは自然発生的に生じると、筆者は見ている。問題はその道筋を見つけることにあるが、本稿の課題にはしていない。ただ、形態Ⅲの外形的特徴を論ずるだけでは、脱出口は見つからないだろうということは、確実にいえる。

以上の見通しがそう大きく誤っていないとすれば、価値形態という理論構想が貨幣発生論に果たす積極的意義は、おのずから明らかであろう。

注

- 1) 『資本論』現行版は、資本論翻訳委員会訳『資本論第1巻―第1分冊』(1982)新日本出版社(新書判)を、初版は、岡崎次郎訳『資本論第1巻初版』(1976)国民文庫を、それぞれ参照。引用文は必ずしも訳通りではない。本文中の引用箇所末尾に、原文(MEGA, II/10, II/5)のページ数のみを記した。